

伝えたいこと みんなで考える 出前講座

障害には身体障害、知的障害、精神障害などさまざまなものがあり、身体障害の中にも、視覚・聴覚・肢体不自由などがあります。障害のある人が普段の生活でどのような暮らしをし、何を感じているのか。また私たちが疑問に思っていることについて出前講座を通じて考えます。

はじめて気付く

目隠しをして、箸で豆を器に移す、白紙の紙に文字を書く、指で触って物が何かを当てる体験をします。簡単そうに見えても、実際にやってみるとなかなかできません。

視覚障害の人が使っている、白杖①や音声時計②を使ってみます。普段私たちが触れない物なので、使用してみると不思議な感覚になります。しかし、目隠しをして使うことで、初めて便利さに気付きます。そういった物がどんな発達していくことで、障害のある人の生活環境が向上することを知らします。



普段考えないからこそ

「視覚障害の人ってどうなんだろう」と考えたり、目に見えていることと、実際に見えない中で触っただけの感覚とは全然違うということを体験してほしかった」と講座の中で伝えます。

障害のある人と、普段なかなか触れ合う機会はありません。児童は講座に向けて、事前に視覚障害のことや中途失明のことについて調べたり、質問を考えました。普段考えることがないからこそ、障害について考えるのは難しい。ここで知って欲しいのは、私たち一人一人に小さなことでも視覚障害の人の手伝いができるということ。「これは○○ですよ」と言ってもらえるだけでも、手助けになることです。



しっかりと見る

手話は、聴覚障害の人のコミュニケーションの一つです。簡単な手話単語やコミュニケーションの方法を学びます。後ろから話しかける場合は肩に軽くぼんぼんと触れます。前を向いているからといって、必ずこちらを見ているとは限りません。手話、筆談、口話、身振り手振りなど、コミュニケーションの取り方はさまざまですが、重要なのは互いに相手をしっかり見ること。

手話を覚えるのには始めは戸惑っていた児童も「この単語は、手話でどうやって表現するのか考えながらだと楽しく学べた」と、最後は手話で自己紹介ができるようになりました。

将来に渡ってつながる思い

聞こえ方は人それぞれ。それは障害の有無にかかわらず、感じ方が違うからです。思いを伝えるには相手としっかり向き合うことが大切です。児童からはたくさん質問がきました。それはこの講座にしっかりと向き合えたからこそです。「この出前講座を通じて学んだことを、普段の生活で少しでも思い出して、困っている人がいれば、どんな人でも手を差し伸べるようになって欲しい。また、そうすることで将来に渡って、障害のことを理解してもらえたらうれしい」と伝えます。



共に歩む ~自立すること 支えること~

こばやし まこと 小林 誠さん

視覚障害のある小林さん。守口市在住の盲導犬ユーザーの一人です。名古屋出身で小さい時からほとんど目が見えず、視覚支援学校に通っていました。視覚支援学校の高等部を卒業してからあんま・マッサージ師の資格を取り、仕事の関係で10年前に守口市に引っ越しして来ました。現在、1人暮らしで、ヘルスキーパー(会社の中にある社員向けのマッサージをする)の仕事をしており、毎日、電車での通勤・家事など全て一人でこなしています。それを支えているのが盲導犬のハピネスくん。盲導犬とは18歳の時から共に過ごし、現在は7頭目になります。

17歳までは何とか杖を使わなくても歩けるくらい視力はあった小林さん。視力が急に落ちて見えなくなり、ある日、駅のホームから転落したことがありました。それをきっかけに、杖よりも安全な歩行をするために盲導犬と歩くことを決めました。盲導犬は2歳〜10歳までが仕事のできる期間ですが、病気などさまざまな要因で8年間生活を共にできないこともあります。体調が悪くなったり、癌になったり、また、病気になることなく、歩いている最中に何か嫌な思いをして、それがトラウマとなり歩けなくなることもあります。盲導犬にもそれぞれ歩き方に癖があったりするので、それに合わせた指示が必要です。盲導犬はスノーボードではありません。道の案内をしてもらっているわけではないので、自分の頭に地図がないと歩けません。あくまで歩行を支える存在。「盲導犬ははじめだと思われているけど、実はそんなことはないんですよ。うちの子は甘えるし、やんちゃだし。けれど、とても世話を焼いてくれるんです」と小林さんは笑顔で言います。自立すること、支えること、この2つは相反するのではなく、誰かの支えがあってこそ安心して自立できる。そう思ったことを感じさせます。

5歳からサッカーを始め、高校生まで一般のサッカーをしていた古島さん。日本代表を目指しましたが、限界があると知って一度夢を諦めました。大学生になったある日、誘われたのが



諦めかけた 夢をもう一度

ふるしま けいた 古島 啓太さん

皆さんはデフサッカー(聴覚障害者のサッカー)をご存じですか。守口市在住の古島さんは、デフサッカー(デフリンピック)の日本代表のキャプテンを務めます。デフリンピックとは4年に1度開かれる聴覚障害者の国際的なスポーツです。

デフサッカーは基本的にサッカーとルールは同じですが、選手全員が聴覚障害のある人であり、試合中は補聴器を外さないとけません。また、笛の音が聞こえないので主審が旗で知らせます。コミュニケーションは手話で取りますが、プレー中はアイコンタクトや身振りなどで伝えます。そうしたコミュニケーションの中でサッカーをすることもデフサッカーの魅力だと言えます。

サッカーは基本的にサッカーとルールは同じですが、選手全員が聴覚障害のある人であり、試合中は補聴器を外さないとけません。また、笛の音が聞こえないので主審が旗で知らせます。コミュニケーションは手話で取りますが、プレー中はアイコンタクトや身振りなどで伝えます。そうしたコミュニケーションの中でサッカーをすることもデフサッカーの魅力だと言えます。

きっかけでデフサッカーに出会い、デフサッカーにも日本代表があることを知りました。もう一度全力でサッカーをして、違っかたちで日の丸を背負う決意をしました。

普段は会社で事務の仕事をしていました。職場でのコミュニケーションは基本的に口話で、分からないところは積極的に聞き、何度聞いても分からないことは筆談をします。長所は明るくて意欲があること。仕事が終わってからサッカーをしているので休む時間はありません。それでも頑張ってきたのはサッカーが好きという気持ちだけでなく、日の丸を背負うことの重みや、今までお世話になった人たちへの恩返しもあります。「自分が日本代表で頑張っている姿を見せ、話題になることで、デフサッカーに関わる人や会社などの活性化にも貢献できる。今できること、楽しめることを精一杯やりたい」と言います。